

EurekaXIV

六年制通信 No.17 令和8年9月4日(金)号

ミスリード

夏休みに入ってすぐ、朝刊を見て「うそお!」と声が出ましたよ。東野圭吾さんが亡くなった記事です。私、おそらく彼の全作品を読んでいます。私と二つ違いなだけです。これから先もずっと読んでいけると思っていたのに、ショックです。エッセイの『あの頃ぼくらはアホでした』なんか同時代人として面白かったなあ。初めて読んだのは『幻夜』、続いて『白夜行』(普通順番が逆ですけど)、『秘密』、『手紙』、『ナミヤ雑貨店の奇蹟』、『トキオ』、『容疑者 X の献身』、そして最新にして最後となった『永遠の記憶』(これは先に『容疑者 X の献身』を読んでおいてくださいね) など、ミステリーの分野はもちろん、人間模様の大河ドラマとしても健筆をふるっていたのに…。残念でならないです。お勧めを一冊に絞るのは難しすぎますが、数ある作品の中でミステリーの醍醐味と言いますか、作家の張り巡らせた伏線によって読者をミスリードする傑作としては『流星の絆』だと思うので、東野さん初体験の人は手に取ってごらん。

そう言えば、ミスリードで思い出したのですが、こんな話を読んだので紹介します。

昭和 47 年 11 月 29 日、モスクワ・シェレメチェボ空港で離陸に失敗して墜落した DC8 機がありました。機長も亡くなったのですが、マスコミはこの事故を機長の気のゆるみが原因ではないかと推論を立てました。その証拠にボイスレコーダーには「やっこらしよ、どっこいしょ……」という機長のおどけた声が残っているということです。

ここまで読んで皆さんはどう思いましたか。この機長にどんなイメージを持ちましたか。マスコミの論調は当然機長を非難するものだったでしょうが、皆さんも同じように、いや、実際のところはわからないとしても、少なくともこの機長にいいイメージは持てないのではないのでしょうか。では、以下を読んでみて下さい。

1974 年 1 月号の『文藝春秋』の「巻頭随筆」に書かれたものです。作者は服部公一という作曲家です(非常に有名な作曲家である服部良一さんとは別人です)。

「松本先生の英語の授業には、中学一年生の生徒は毎時間死にものぐるいであった。先生の質問にあやふやな返答をしようものなら、その罵詈雑言と共に使い古しのちびたチョークが、なさけ容赦なく機関銃のたまのようにとんで来た。」服部さんは昭和一桁生まれですから、その頃の厳しい授業は察するに余りあります。それから同級生の M 君の話になっていくのですが、「M 君は背が低かったので最前列教卓のすぐ前にいつも坐っていた。したがって私などより、松本先生の殺人光線のボルテージがずっとたかい。」この M 君が「松本先生の授業の前はいつもかなり緊張していて、細心の下調べをしていた。そして授業のベルが鳴るとつとめて気をひきたたせるようにおどけた

調子で、「やっこらしよ、どっこいしょ」と調子をつけてドスンと椅子に腰をかけ、この苛烈な授業を待つのであった。」そして「Mのこのひょうきんなかけ声は、近くの席のもののまねるところとなり、そこそこで「やっこらしよ、どっこいしょ（……ドスン）人事を尽くして天命を待つ、どうぞ松本先生おてやわらかに」という風に使われ、この授業の前のはやり言葉になっていた。」それから二十数年の後、この M 君こと村川政義はみちがえる程立派な面がまえの日航の国際線機長になっていた。

この再会の数ヶ月後に例の事故があったわけで、服部さんは報道を見て、村川機長の「やっこらしよ、どっこいしょ」が決して気のゆるみではないと確信していると書いています。服部さん、黙っていられなかったのでしょうか。ちなみに彼の文章は非常に抑制のきいた名文です。ここまで読むと、どうですか、皆さん。村川機長がパイロット席につく時に発した「やっこらしよ、どっこいしょ」を服部さんと同じように、気のゆるみどころか大真面目に仕事に向かう彼なりの儀式であると思いませんか。

私はこの夏にこのエピソードを読んで、私たちは自分以外の人のことを本当にわかって批判したり、あるいは賞賛したりしているのだろうかと考えさせられました。世間にあふれる様々な記事は、書き手が意図してもしなくても勝手に読者をミスリードしている場合があるということを私たちもよく知っておくべきですね。

今週のおすすめ

・宮島未奈 『成瀬は信じた道をいく』（新潮文庫）

No.14 にも登場してもらいましたが、お久しぶりの成瀬あかりです。今回も絶好調です。島崎みゆきは東京へ、成瀬あかりは京都へ（と言っても滋賀の実家から通学ですが）、二人は初めて分かれてしまうのですが、あのゼゼカラも健在でよかったです。今回は五つの物語が収録されています。お笑いコンビ「ゼゼカラ」（膳所から世界へ！）ファンの小学生が成瀬と出会いどんどん影響を受けていく話。京都大学へ進学する成瀬あかりがどうやら一人暮らしをしたいと思っていると早とちりして心配する父の話。成瀬のバイト先へ何度もクレームを入れてくる女性が成瀬の要請で嫌々ながらも結局は万引き犯を見つけてしまう話。びわ湖大津観光大使に選ばれた成瀬と、祖母も母も大使を務めたという篠原かれんが M-1 ならぬ「観光大使・1 グランプリ」に挑む話。ある日突然成瀬あかりが「探さないでください」という書き置きをして失踪？してしまい、皆大慌てで搜索する話。果たして成瀬はどこに。ヒントは、大晦日、けん玉。

以上、まあ、前回同様成瀬あかりを本当に魅力的に描いています。これ、まだ続編がありますね。それで最後のようなのですが、またいずれ紹介します。今度は京都で大暴れ、なのだそうで、楽しみです。前作の『成瀬は天下を取りにいく』を未読の人は、やはり順番に読んだ方がいいと思います。その方が成瀬の魅力がもっと伝わりますよ。ちなみに成瀬は京都大学へ進学するのですが、担任からは「普通に受ければ受かる」と言われていたそうです。これ、普通教師は言わないセリフですけど、相手が成瀬あかりなら十分ありかなと、そう思わせるところが彼女にはありますね。

BGM は イルカ の 雨の物語 でした…。